The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性被害の心理と支援に関する研究
Author(s)	岩崎, 直子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44174
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	岩崎直子（いわさき なおこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　17474　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**性被害の心理と支援に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　三木　善彦 （副査） 教　授　藤岡　淳子　　助教授　西澤　　哲

論文内容の要旨

性被害は精神的・心理的影響が非常に大きく、心身や人間関係、その他の社会生活に重大なダメージを与える。このことについての関心は、近年、急激とも言える高まりを見せ、さまざまな取り組みがなされつつある。しかし、その渦中にあってすら、いまだ十分に顧みられているとは言い難い問題に、「顔見知りの間で起こる性被害（date/acquaintance rape：DAR）」、「被害者の身近にいる“重要な他者（significant others：SOs）”」「男性が受ける性被害（male rape）」、そして「社会の人々が持つ性被害/被害者に対する偏見（rape myth）」の4つが挙げられる。本論文ではこれらに焦点を当てた調査研究をすすめることで、支援に必要な被害の実態を知ること、被害者自身に対する支援に加えて、被害後さらに受ける恐れのある二次被害の軽減、被害者自身がその内側から自らを苦しめる自責感の軽減に向けての示唆を得ることなどを目的とした。

第1章から第3章では、性被害を取り巻く諸問題についての先行研究を概観した。第1章では性被害に関する国内外の定義や被害調査、主な心理・精神的影響を、第2章では被害/被害者に関する偏見（rape myth）と、“重要な他者（significant others：SOs）”を含む社会の反応を取り上げ、続く第3章では「顔見知りの間で起こる性被害（date/acquaintance rape：DAR）」と「男性が受ける性被害（male rape）」について概説した。

第4章から第6章は<実証的研究>とし、3つの調査を通して上記の問題点4つに主に着目して検討を行った。第4章（研究1）では、“日本の男女学生における性被害の実態”調査を行った。その結果、女性の74.0%、男性の25.0%が何らかの被害経験を持ち、レイプ（既遂）被害率は女性のみで3.4%、それらは全てDAR被害者で、社会に広く流布している性被害に関する偏見（rape myth）にみられる特徴にはあてはまらず、警察への通報は行われていなかった。「最も傷ついた被害経験」にもレイプを選んだ者は全員が調査実施時点までに被害事実の開示を行っておらず、その背景には他者からの反応を恐れる様子も伺えた。また、全回答者の約3割が近しい他者から被害の開示を受けたSOsで、その7割以上が被害者を支えるために“自分自身にもサポートが必要”だと感じていることがわかった。さらに、男性被害者は大半が“顔見知り”の“男性”から被害を受けていたのだが、女性加害者も8.8%存在していた。ほとんどの者は被害経験を“おふざけ、いたずら、スキンシップ”と捉えており、『被害調査』に対して「被害経験あり」との肯定回答を示す行為と、それに対する認識との間にギャップがあるように見受けられた。全体としての結果からは、被害に対する偏見（rape myth）の是正と性教育の重要性が浮き彫りとなった。

次に第5章（研究2）では、旧文部省委嘱事業の調査研究計画の一環として、『「女性に対する暴力」の被害に関

する調査研究』を行い、その一部として「レイプ被害に関する意識調査」を実施した。その結果、男性は女性に比べて rape myth を肯定的に捉えていることがわかった。特に DAR 事例では加害者である男性側の責任は軽く、レイプにあたるとは認識しておらず、被害者の傷つきも少ないとしていることがわかり、その傾向は婚姻関係にある男女のケース（marital rape）でより著しかった。また、女性は、いわゆる「女性側の“隙”を責める事例」や被害者の抵抗が見られない事例に関しては、男性よりも被害者に対して厳しい見方をしていることも明らかとなった。

つづいて第６章（研究３）では、研究１、２を通して浮かび上がってきた問題を受けて、さまざまな rape myth や具体的な性行為を例示し、被害や被害者に対する心理について、SOs へのニーズと共に調査を行った。その結果研究２と同様、男性は女性に比べて男女双方への偏見（rape myth）を肯定的に捉え、具体的に挙げた性的行為は“被害にあたらない”と考えていることがわかった。この傾向は特に“女性から男性に対して行われる”性的行為に顕著に現れたが、その背景には男性が成長発達の途上で否応なく受けるジェンダー役割規範の社会化の影響が伺えた。一方女性では、被害者の性別などの属性に関わらず“性被害”として受け止めている傾向がみられ、男性よりも性被害への現実的な危機意識を高く有しており、実際の被害経験率も高かった。しかし、それに比べると、全体として捉えた“性被害”というものが“自分と関係がある”との回答は、男性より有意に高いものの、わずか３割弱の肯定に留まっており、“自分は大丈夫”という幻想のコントロール感や、“公正な世界”の存在を信じる心理的な防衛機制を基にして、安全感や安心感を得ている様子が伺えた。さらに、性被害への現実的な危機意識のない者は、それを有している者に比べて、性被害や被害者に対する偏見を肯定的に捉える傾向があることがわかった。

最後に、第７章において、上記の３つの調査を通して得られた知見を基に今後の性被害における被害者支援の方向性と、今後の調査研究についての提言を行った。具体的には、DAR、SOs、および男性被害者に関する性教育・心理教育の重要性、早期の介入への注意点、偏見やジェンダーの社会化が被害者や周囲の人々・専門家にもたらす影響、専門家への啓発が必要とされていることなどである。性被害が“男性加害者－女性被害者”の間でのみ起こるものでなく、“個人の間で起こる”ものだと再定義され、被害者自身/SOs/支援の専門家も含む社会の人々からジェンダー役割規範に関する思い込みや偏見が取り除かれることの実現によって、“被害者や SOs が望んだ時には常に適切なサポートを受けることができる”世の中に一歩近づいていくものだと考える。本研究の意義は、そのための基礎的データを提供すること及び、今後の各分野の調査研究・支援の取り組みに向けて必要な問題提起を行うことの２点に資することができたことだと言える。今後は、今回焦点を当てた４つの問題に加え、専門家も対象とした被害と被害者を巡るさらなる包括的な調査研究を、学際領域にある被害者学の利点を活かして実施していくことを課題として提言した。

論文審査の結果の要旨

本論文は性被害に焦点を当て、①顔見知りの間で起こる性被害、②被害者の身近にいる重要な人々、③男性が受ける性被害、④被害者に対する偏見について調査研究を進めた。その結果、レイプ被害の多くは顔見知りによる被害であり、被害の開示を受けた人の７割以上がサポートを必要とし、調査対象になった男子大学生の 25%、女子大学生の 74%が何らかの被害経験をもち、男性は女性より性被害に関する偏見が強いなどの傾向が見られた。この結果から、被害者の支援だけでなく、一般市民に対する啓発活動の重要性が示唆された。本論又は博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。